

まちの史跡めぐり……⑨6

町文化財専門委員 石瀧 豊美

江戸時代へようこそ (9)

= 村の一年 (続き) =

前回に続いて『村役人心得』を見ていきます。

【五月】

地頭納め

これも三月の項に上がっていました。地頭に対する季節の納入物を言います。

少し詳しく取り上げてみることにしましょう。すでに述べたことですが、地頭とは藩主から土地（知行地）を与えられている中・上級の武士で、これを村の側から見た時に地頭ということになります。

地頭は村の収穫米からあらかじめ決められた割合で年貢を徴収します。しかしそれだけではなく、村からは季節毎に「納め物」を持参していました。

幕末期に篠栗村の庄屋を務めた藤金作（後に衆議院議員）は、納め物について、次のような証言を残しています。

地頭には知行所の百姓から年末、五節句に物品を提供し、年末には門松、栗ハイ簀（正月用の簀）、餅搗棒、席などを持参しました。年男として掃除に向くこともありました。三月にはヨモギ、田螺な

どを持参しました。

藤金作は、村から地頭（侍）の家にこうした納め物を持参すると、その家の留守居（秘密的な役割を担った家来）が応対し、ここぞとばかりに門松に難癖を付けたりしたということです。こういう時に一言言わねば気が済まない、こういう時しか威勢を示せないということがあったのでしょうね。

ところで、こうした納め物は、武士と村との力関係で、村に過重な負担がかからないようにという配慮もあつてのことでしょうが、福岡藩では一定の基準を定めていました（以下、表記は「藩制一般作法」にしたがっています）。

次のようになります。数字は石高百石を基準にしているので、千石ならばその一〇倍というふうに換算します。

【年始入用】

菰一〇枚、内一枚はかます。／幸木一把。／橙一〇。／栗簀一把。／勝り藁一把、ただし五把からげ。／半縄一方、ただし三〇尋。／譲り藁一把。

／もろむき一把。／根引松一〇本。／餅突棒一〇本。／詰夫二人。

【三月入用】

田螺子三合。／よもぎ五升。

【五月入用】

粽かや一把、ただし二尺メ。／根よもぎ・家上葺萱。

【盆入用】

生霊菰一枚。／麻から（殻か）一把。／めんとう萩一把。

少し説明を加えておきます。古老からの聞き取りによつて、まとめたものです。

- ・勝り藁は、ハカマをとつて、芯だけをしめ縄にしたものか。
- ・半縄は大縄と小縄の中間を言うか。小縄は鉛筆ぐらいの太さで、藁三〜四本を綯つて縄にする。
- ・「もろむき」は今は「もろもき」と言う。裏白のこと。
- ・立花は花橘がよく、今はなかなかない。橘の木で花が咲いているもの。正月用の盆栽に使う。赤い実のなるヤブコウジで代用することもある。
- ・餅搗きには杵でなく、棒をもちいた。三〜四人で、一つ

の臼を搗く。

- ・「ちまきがや」は熊笹のこと。二尺メは、円周が二尺の意味。
- ・家上葺萱は、萱が枯れる前に、夏の内に刈る。干すと、しなやかで丈夫な萱ができる。この時、雑草や下草も一緒に刈る。また、屋根葺に使うものは、勾配で滑り落ちないように、二、三年かかって貯めておく。麦藁だと七、八年しかもたないが、萱なら二〇年は葺き替えの必要がない。
- ・生霊菰は、真菰を、半乾きになるように日陰干しにして編む。
- ・「麻から」は、仏様用の簀に用いる。麻の皮（繊維）をむいてつくった白い軸で、簀の長さに切る。
- ・「めんどう萩」は、名を「ミソハギ」ともいう植物で、溝の淵に時たま生えていた（溝萩か）。

以上は、石瀧が以前『粕屋町誌』に書いたものを利用しました。

久我記念美術館

4月企画展 9日(土)~24日(日)
(月曜休館・入場無料)

伴 信行書道教室 思い想いの四人展

案浦博子・木村夏子
下村和恵・下村貴子

4月の久我記念美術館は、9日から24日まで「伴 信行書道教室 思い想いの四人展」を開催します。

伴先生の書道教室で、楽しく勉強が続けている仲間四人です。まだまだ勉強も浅く、未熟な私たちですが一人ひとり思い想いに、書を学ぶ喜びや楽しさを表現してみることにしました。「これなら私にもできるわ」そんな思いで、見ていただいたらいいと思います。どうぞ見に来てください。よろしくお願いいたします。



案浦さん



木村さん



下村(和)さん



下村(貴)さん



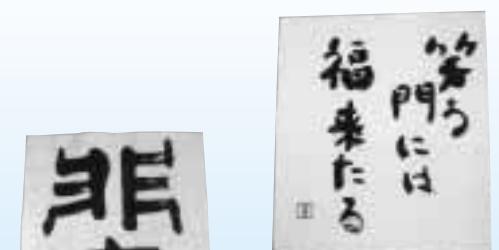
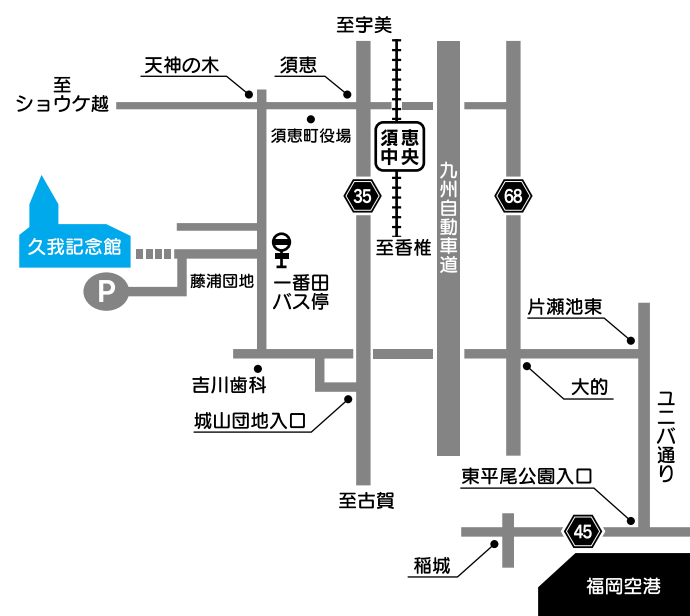
案浦博子

3 月 の 企 画 展

中尾勝次・印藤京子 日本画展

5日(土)から27日(日)まで(月曜休館・祝日の場合は翌日休館・入場無料)

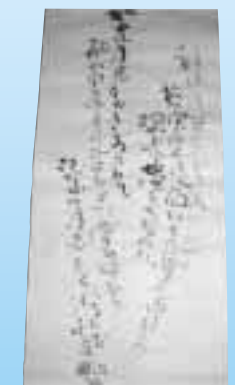
久我記念館アクセスマップ



下村和恵



下村貴子



木村夏子